

# 教 名 聞

第 113 号  
(発行日)

2020 年 2 月 1 日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒 6638113 西宮市  
甲子園口 2 丁目 7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 終活の問題によせて

昨年、東本願寺の報恩講の折に、池田勇諦師が講演された内容が機関誌「真宗」の二月(二〇二〇年)号に掲載されていました。

まず最近よく話題になる「終活」のことを取り上げられ、終活とは人生の終末を控えてそこにしておかなければならないことがあるのではないかと。

いわゆる自分の人生、身のまわりを整理をする、あるいは片付ける、そういうことで「終活」ということがよく言われるようになりました。中には納棺体験というので棺桶かんおけの中に入っ

て、いっぺん自分の死をイメージ体験する、そういうイベントすら葬儀社の主催で行われたりしています。また、もう仏壇はいらない、墓もいらぬ。そういうものを残しておく子供たちが世話をしなくてはならなくなり迷惑をかけるか

ら、自分の代で仏壇じまい、墓じまいをしておくという風潮もあります。仏壇も墓もなくなってしまうともうとも手を合わす縁もなく、亡き人を偲ぶことも希薄になり、ひいてはお寺もいらぬということにもなっています。

池田師は終活について「終活で一番大事なことは何か」という問いを出され川柳の一句を紹介されています。

「行く先を 告げずに  
友は逝きました」

これは行方不明になったということではないでしょう。うか、といわれ、終活で大事なことは、亡くなる前に自分の行く先をはっきり告げて逝くことではないかとも言われています。

こういう問いを前にして「死んだらしまい」というのは、「死んだらしまい」というのち「しかその人が知らないからです」と池田師は指摘していますが、もつともなお話だと思えます。

「死んだらおしまい」というのち「しか知らない」人が、死なないのち、つまり量りないのちに目覚める。これが仏教でありましよう。仏教の本質は「死なないのちにであう」という一句に収まるのではないのでしょうか。

このことを真宗の教えに訊ねてみますと、まず正信偈たずでは、その第一句に「帰命無量寿如来」と親鸞聖人が仰せられています。まさに無量寿のいのちに帰し、無量寿(量りなきいのち)をいただいて生きる、量りないのちにであうことが正信偈の最初の一句からうかがえます。

「私の肉体のいのちは死んでも私は無量寿のいのちに生きる」、これが終活に

とつて一番大事で、古来の問題を「後生の一大事」と言ってきました。池田師はここを

「私たちは肉体に閉じ込められたいのちしか知らない。帰命無量寿如来の無量寿なるいのちということからは、この肉体の縛りから、束縛から解放された真実なるいのちなんですね。無量寿なるいのちに目覚めて生きよということ」と仰せられています。

無量寿如来とはアミダ仏のことですが、無量寿とは何でしょうか。それは読んで字の如く量りないのちでありましよう。この量りなきいのちの活動は私たちの思いや分別や願望をこえて、刻々と万物を動かし、ただ今私をここにあらしめている働きともいえましよう。

こう言いますと「それならこの宇宙の生命活動ですか」と言われそうですが、それも確かに無量寿の一面でありましよう。ただし、それは量りなきいのちの活動を自然科学的に捉えたい

のち、私たち（人間の認識形式）が対象的に捉えたすがたでありましょう。ですからそれは物質的な働きに重点を置きたいのちの見方であつて、アミダ仏のいのちの一面ではあります。全てではないでしょう。

この無量寿のいのちには物質的な側面だけではなく意識的な側面があります。う。

たとえば宇宙を観察している科学者に働いている「意識」、この意識は量りなきいのちを対象的に捉えて宇宙の活動を知る「意識」であつて、この意識の働きも無量寿のいのちの働きの中でありましょう。

しかも意識の領域は量りがない。この広大な宇宙を知ることができるのは意識の働きですから、物質の活動も量りがないけれども意識の働きも限りがないといえないでしょうか。

パスカルのいうように、人間は物質的には小さな一本の葦あしのようなものです。しかし太陽や月などの大自然を認識することができま

す。それは意識があるからです。

このように無量寿は物質の領域と意識の領域を含んでいる働きといえましょう。

そして大事なことはこの無量寿には、豊かな功德（よき働き・よき性質）をもっているといわれています。このことを発見されたのがブツダ（釈尊）です。この無量寿には光明無量のよき働きがあると説かれました。そうすると無量寿とは寿命無量を本質として光明無量の働きがある言つていいでしょう。

このような無量寿のいのちの働きの上に、宇宙も万物も私たちも置かれている。ただこの働きに目覚めていないのを迷いと言ひ、迷いあるがゆえに煩惱を起し悪業をなすのが衆生の罪の姿でありましょう。

光明無量の光明の働きはなにかというと、光明とはさとの智慧であり、この智慧は慈悲として働くので、光明は智慧と慈悲の活

動といえます。それを一言で言えば大悲の智慧、これが光明の内容といえます。ですから、無量寿如来とは「大悲の智慧なるはかりなきいのち」ということで、あたたかいのちです。単に自然科学的物質的に捉えた冷たいのちではありません。

このあたたかいのちに私たちは今生かされておられ、このいのちに運ばれておられ、このいのちのいとなみの中で暮らし、このいのちの中で死んでいく。

この場合、普通に言つて「私」とは何かと言へば、さしずめ肉体と心の統合体（五蘊）でありますが、日常の私は自我意識を中心に生きています。

自我意識は勝手なもので、いつも自分の都合の良いことを欲し、都合の悪いことを嫌悪しています。これが自我の煩惱といわれ、そこには煩悩が絶えません。

自我は私の存在の一部の働きにもかかわらず、私の存在を自分の所有物のよう

に思い込み、何事も自分の思う通りにしようとしません。いつまでも健康で長生きで、みんなから大事にされて、豊かで、いろんな楽しみがあるようになどと実に都合の良いことを凡夫の自我はいつも考えています。

量りなきいのちの働きは無数の因縁の動きとして活動していますので、肉体は自我の思いを超えて自我の自由になりません。それで肉体は老化し、病気にもなり死んでしまいます。

私の肉体は無数の因縁の道理に順つて動いているので老化したくないと思つても因縁の道理で老化します。病気になると思つても、因縁が整うと病気になると思つても、死なないようにと思つても因縁の道理で死んでしまいます。因縁の働きは、自分にとって都合のいいようにはいきませぬ。ですから何事も自分の思い通りにしたい自我は苦しみ、不安をもつてしまうのです。

そうすると、自我の勝手な思いをすてて、因縁の道理に順つて生きるならば、苦しみや悩みはなくなると思われれるのです。自分の思いの都合を捨てて、起こつてきた因縁の事実（今の出来事）にしたがつて生きる、それが古来から人生の達人・賢者の生き方でした。例えば良寛さんのお言葉に

「難儀を逃れる方法」と問われて、良寛さんは「病む時は病むがよろしく候、死ぬ時は死ぬがよろしく候」

と応えています。良寛さんは仏教者ですが、ローマの哲人であったエピクテトス（紀元一世紀）の言葉に

「出来事が、きみの好きなように起こることを求めぬがいい、むしろ出来事が起こるようにならぬことを望みたまえ。そうすれば、君は落ち着いて暮らせるだろう」

と言つています。ここで「出来事が起こることを望み

まえ」といわれる意味は、「出来事を自分の都合の善し悪しで受け取らず、自分の好き嫌いで考えず、出来事の通りに自分の望みを合わす、すなわち出来事に素直にしたがいなさい」といわれるのであります。

しかしながらどちらにしましても、こういう人生の達人や賢者の生き方は凡夫にはなかなかマネはできません。おろおろしたり、嘆いたり、不安に圧倒されたりでバタバタしがちなのが凡夫です。

そんな中で、不安が起こり、嘆きが起こる時、それを縁としてお念仏を申ししていく。これはだれでもできましょう。病気で不安なとき、人間関係で悩むとき、事業がうまくいかず悩むとき、その煩い悩みを縁として、苦しいままでお念仏を申す。申して楽になろうとするのではなく、楽になれないからお念仏を申す。「困ったからお念仏」「苦しかったらお念仏」「どうにもならなくなつてのお念仏」な

のです。苦しみを取ろうとしてお念仏をしがちですが、むしろ逆なのであって、苦しみが取れないからお手上げのお念仏なのです。アマダ仏からまずは「どうにもならねば我が名を称えよ」（二十願）と仰せられるのであります。

こうして煩い悩みがありつつ、お念仏を申し、お念仏のお心を聞いていく、これが凡夫の仏道であります。先ほどの賢者や達人のように「与えられた因縁に素直に順う」ことのできる者に残された道なのであります。

そしてお念仏を申しつつ、お念仏のお心そのものを聞かせていただくのです。お念仏のお心（第十八願）は、量りなき大悲のいのちである阿弥陀仏が「ここに居る、あなたと共にいる、あなたを抱いている、あなたを引き受けている、あなたを浄土に連れて行く」と喚びかけて下さる仰せです。一言で言えば「助ける」の仰せです。大悲の智慧から現れた第

十八願の仰せを聞くとき、不安な中、うつつとうしい中にもほつと一息つけさせて下さる。

そして老病死を超えて、なにものにも妨げられないアマダのいのちをほのかながらも知らせて下さるのであります。さわり多き人生においてお念仏は、なにもにも妨げられないのちが、私を支え、私を生かして下さっていることを知らせて下さる。

このアマダ仏との結びつきをさまざま悩みや思い通りにいかないことを縁として、お念仏からお知らせいただくのです。むしろアマダ仏のはかりなきいのちの外に自己は無いことをほのかながらも知らされるのです。そこに老病死の束縛から解放されていくのであります。

そうすると、単にアマダ仏にお任せして生きるというだけではなく、お任せしつつ、そのつど、自分の分を尽くしていくという積極的な生き方が生まれてきます。

よく真宗の生活は「アマダ仏にお任せする生活」だといわれます。そうなのですが、ただ起こってくる出来事にも流れていくというか、まかせていくというだけのことでなく、そのつど起こってきた出来事の中で、アマダ仏に支えられながら自分の出来るだけのことをしていこうという力が湧いてくるのではないのでしょうか。

(了)



## 《春季彼岸会》

三月二十二日（日）

午後二時始まり

### 《遠方法話予定》

- 二月十三日。名古屋。高畑会館。午前十時。法話・座談。
  - 三月十四日。福井別院・午後一時始。法話・座談。
  - 四月一日。名古屋。高畑会館。午前十時。法話・座談。
- (詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

### 【住職雑感】

大谷派の瓜生崇師が本山で、四名で対談している記事が「教化研究」に載せられていた。その中で瓜生師の発言が注意を引いた。というのはご自分の開法上での師匠は本願寺派の大峯顕師だと言われたことである。こういう大谷派の本山での座談会で本願寺派の方を自分の師匠だと言う人は滅多にいないからである。普通は大谷派で著名な学者を自分の一番尊敬する先生であると言われるからである。私もこういう場では大谷派の著名な学者を自分の先生と言わないと自分自身が低い評価をされるのではないかとおそれをもってしまふからである。なぜなら本願寺派の教学は大谷派では軽んじられる傾向があるからである。

また瓜生師は「自分は宗門の問題よりも自分自身の往生の確認が一番問題だ」と発言されたことである。こういう座談会では、寺はどうあるべきかとか、社会の問題に我々はどうか答えねばならないかとか、どう門徒を教化すればいいのかというような問題が一番大事なことのように話をするのが通例であり、もしそうでなければ瓜生師のような問題は信心の個性に陥っていると批判されかねないからである。それを瓜生師は「自分自身の救いが一番問題だ」と本山の場で公言された。私は瓜生師は自己に忠実な人であり、また勇気のある人だと感銘したことであった。

# 聖道権仮の方便に

(和讃問答)

聖道権仮の方便に

衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

悲願の一乗帰命せよ

(浄土和讃)

現代語意識（聖道門の権仮方便の教えに、衆生が久しい間止まって、諸々の迷いの世界を生死流転する身となった。それゆえこの方便の道を捨てて、早く弥陀大悲の本願に帰入せよ）

\* \* \*

N 「聖道権仮の方便とは」

D 「聖道とは聖道門のことで、この世で悟りを開くべく自らが修行していく教えです。宗祖は、聖道門の教えは私たち凡夫にとって弥陀の本願の救済にいらしめる教育的手段の教えであるという、いわば仮に設定された教えということ、聖道権仮の教えといわれ、アミダ仏の本願の救いへと導き入れるお手立てである、ということの方便と云われます」

N 「では具体的にはどうい

教えですか」

D 「天台宗とか真言宗とか禅宗などです。ただしこれらの教えが自分自身を離れて客観的に方便の教えであると決めることはありません。この教えで修行している人は自分が関わっている教えが方便の教えであるとは思っていません。ですからたとえば真言宗などで修行をしている人に向かって、あなたの教えは仮の教えですなどということとはひかえねばなりません」

N 「なぜこれらの教えが方便の教えだといわれるのですか」

D 「これらの教えに私自身が関わる時、愚かな私にとっては聖道門の教えは権仮方便ですとはいえます。煩惱具足の盛んな私にとっては聖道門の教えは至難の道であって、とてもこの教えによって救われることは出来ないという観点から、私にとっては権仮の教えであって、それらの教えは人間能力の限界を知らせて下さり、それによって本願に帰

せしめて下さるといっているので方便の教えと言われるのです」

N 「へ私にとつては」権仮方便の教えだといわれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「でも歴史上には聖道門の祖師方のように悟りを開いたお方もおられるのですが」

D 「ええ、そういうお方は既に仏に成られたお方が衆生を救うために、この世に出て来られて、人間とは何か、人間の幸せとは何か。どういう生き方が本来のあるべき生き方であるかなどを説かれたお方です。もともと仏だった方がこの世に出て下さって、人間のあるべき姿や生き方を教えて下さった。それを私達も学んで、ああいう境地に達したい、悟りを開きたいの願いを起こすようになり、修行に入る。そういう修行を通して人間の限界を知り、遂に本願に帰命させていただく。このようにして本願に衆生を帰せしめたもうお方が各宗の祖師方のようなお方だと、宗祖は見えておられると思います」

「このご和讃でことに教えられることはどういことでしょうか」

D 「それは方便の教えに止まらず早く弥陀の本願に帰して救われよ、とのお心です」

N 「なぜ方便の教えに止まろうとするのでしょうか」

D 「それは（やればできる）

（できないのは真剣にやらなからだ）という、自分をどこどこまでもたのみにする、その心が強いからです」

N 「この世ではやれば出来るという自己信頼があつて生活を立てていけると思いますが」

D 「ええ、そうです。この世でどう生活を立てていくかという、この世の生き方に於ては人間の頑張りや大事でしょう。しかしいったん永遠無限なものにであいたい、あるいは真実に目覚めたいという場面では、自己をたのみ自分で掴もうとする方向でその真実にあうということではできないのですね。凡夫においてはやればできるという心はやはり自我が中心ですから、自我を張り立てているのですね。ですから仏法の無我の真理を知ることはできないのです。いったん自我が否定されて、自我を超えた永遠の働きに接することができのです」

N 「自我である私が、なんとか覚りたい、信心が得たい、

楽になりたいと思つて根限り励んでいく方向ではダメだといわれ、かといつてなにもせず、このままでもいいかというとも何も変わらない。求めてもダメ、求めなくてもダメとなりませんか」

D 「ええそうなんです。そこが難しいところです。真剣に求めなくては得られない、それも本当です。しかし私が求めて得ようとしても得られない、これも本当です」

N 「ではどうすればいいのですか」

D 「求めても得られない、求めなくてこのままでもダメだ、ということに押し込まれる、求めていけばそこにまで押し出される。そこが大事なのですね。そこまでは人間の努力で行ける、そこから先は行けないのです」

N 「ではどうすればいいのですか」

D 「アミダ仏の本願をどこまでも聞くばかりです。ただ何の計らいもなく我が身に引き当ててただ聞くのです。今ここに来ている、今ここに喚びかけられている本願のお心をお念仏において素直に聞くのです。助からぬ汝を助けるといふ大悲を聞くのです」